

P1-029

思春期の発達障害児の心理・社会的課題
—保護者に対する質問紙調査をととして—桐原 彩¹、郷間 安美子²、鈴木 万喜子³、
武藤 葉子⁴、田中 駿³、郷間 英世⁵¹京都教育大学大学院 教育学研究科、²京都国際社会福祉センター、³京都教育大学 附属特別支援教育臨床実践センター、⁴奈良教育大学 特別支援教育研究センター、⁵京都教育大学 発達障害学科

【問題と目的】

思春期の発達障害児は何らかのしんどさや困難を抱えやすい状況にあることが推測され、検討すべき重要なテーマであると考え。我々は2010年より中学生・高校生の発達障害児を対象に、社会で生きていく上で必要な総合的な力をつけることを目的としたライフスキルトレーニング(以下、LST)を実施している。本稿は、思春期の発達障害児への支援の充実を図るために、LSTに参加した子どもの保護者に質問紙調査を行い、思春期の発達障害児のしんどさや困難などの心理・社会的課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】

中学生から社会人の発達障害の子どもをもつ保護者21名を対象に、自由記述による質問紙調査を行った。質問紙は、「子どもに関する基本情報」と「思春期の発達障害児のしんどさや困難な点」で構成した。しんどさや困難な点の質問内容は、幼少期のものと思春期にある現在のものに分け、現在のしんどさや困難な点は、保護者の視点からと子どもから発信されるものに分けて質問した。自由記述で記載された記述データを意味のまとまりで切片化し、内容が共通しているものでカテゴリー分類し、分析した。

【結果と考察】

対象の子どもは中学生から社会人で、年齢は12歳から22歳であった。診断の有る子どもは17名、ない子どもは4名であり、過去に登校しづりや不登校状態になった子どもは10名であった。子どもの約半数に登校しづりや不登校の経験があり、社会適応の困難さが大きく、しんどさを抱えている子どもがいることが示唆された。また、幼少期と思春期のしんどかった内容を比較した結果、コミュニケーションや社会性の課題は幼少期から思春期まで持ち越す課題であること、「自己理解の未熟さ」は思春期特有の課題であることが明らかになった。子どもが自身のしんどさをどのように捉えているのかについて、「自分なりに理由や折り合いを付けている」「疑問を感じ葛藤している」「しんどさを感じていない・しんどさを感じているか分からない」がそれぞれ約3分の1であり、子どもによって自己理解の程度はさまざまであることが分かった。また、子ども自身は、「自分に対する感情」「友人、いじめなど」「学校と学習」の内容のしんどさを多く抱えていることが明らかになった。このように思春期にある発達障害児は様々な心理・社会的課題を有しており、支援プログラムの構築が必要であると考えられた。

P1-030

思春期児童生徒における成育環境と自尊感情および心理社会的行動との関係

池田 雅則¹、武内 紗千¹、谷田 恵子¹、
宮川 幸代¹、片田 範子²、永井 利三郎³¹兵庫県立大学 看護学部、²兵庫県立大学、³ブール学院大学 教育学部

【背景・目的】

こどもの成育環境の変化と複雑化とともに、児童生徒が抱える困難さも多様で複雑なものになっており、対策にあたってはこどもの成育環境を全体として捉える総合的な視点が不可欠である。児童生徒が感じる困難さと関連が深い要素としてさまざまなことが挙げられているが、親との関係性の捉え方と児童生徒の心理社会的行動との関係性に着目した検討は十分とは言い難い。本調査ではこどもの成育環境のうち、同居している親、親との関係性という要素に着目し、いずれの要素が自尊感情および心理社会的行動との間で関連性が強いのかについて検討することを目的とした。

【方法】

本調査はこどものライフスタイルと健康との関連を明らかにする国際調査の一環として、関西圏の小学4年生から中学3年生までを対象として横断研究を行った。調査期間は2015年12月～2016年2月とした。調査方法は、学校長に調査概要を文書と口頭で説明し、調査票を学級担任から配布し無記名留置で回収した。属性として、学校種別、性別、同居家族、親との関係性等の情報を得た。自尊感情はRosenberg's Self-esteem Scaleを用いた。心理社会的行動の尺度はPediatrics Quality of Life Inventory(PedsQL)とMultidimensional Scale of Perceived Social Supportを用いた。成育環境については、ひとり親の群とふたり親の群、また親との関係性を肯定的に回答する群と否定的な回答を含む群に分けた。そして各属性と各尺度間の関連性についてMann-WhitneyのU検定により検討した。

【倫理的配慮】

兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会承認を受けた。

【結果】

調査票は5校の小学校と4校の中学校に在籍する4,204名に配布し、1,928名(45.9%)より回収した。各尺度合計で11の下位尺度があるが、有意な関連性を示した下位尺度のうち、小学生男子2つおよび中学生男子1つ以外において親との関係性のほうがより強い関連性を示した。PedsQLについては、同居する親の違いにおいて男子のみに強い関連性がみられた。

【考察】

思春期児童生徒の成育環境として、同居する家族の形よりも親との関係性のほうが本人の自尊感情や心理社会的行動に対して強い関係性を示す。性別によって、心理社会的行動と家族関係との関連性の強さが異なる場合がある。このことは、こどもの属性によって抱えがちな背景が異なること示唆させ、属性に応じた支援の構築を考える必要性を想起させる。